

ルネ・ヴィヴィアンの謎

今から八十年ほどさかのぼってみよう。一九〇九年十一月十八日の午後、パリ十六区市役所の死亡届の台帳に、官吏の筆が入念に次のような死亡記録を転記していた。

一九〇九年十一月十八日、六時四十五分、ボワ・ド・ブローローニュ通り二三番地の自宅で、ポーリーヌ・メリ・ターン三十二歳は死去した。ロンドン（英国）の年金生活者故ジョン・ターンとその未亡人で年金生活者の、ロンドンのハイド・パーク通り二四番地居住のマリー・ジレット・ベネットの娘にして独身。本届は、アンジュー通り二番地居住の、後に本書で署名せる親族ではない執達吏アルベール・シャプラン五十六歳とレオン・ジエナン四十歳の申告に基づいて、一九〇九年十一月十八日一五時に市役所助役にしてパリ十六区の戸籍係であり、レジオン・ドヌール勲章佩用者アンリ・ランドランによって作成された。

秋の灰色の空の下、ボワ通り、現在のフォッシュ通りの戸外は、まるでブルーストの登場人物が皆一堂に会したかのように、跳ね回る供回りや貴族的な「クラブマン」たち、名流婦人や高級娼婦たちであふれかえっていた。若い英

国人女性の年金生活者の死になぞ、誰が関心を払うだろうか。その名前は誰にも何も語らないのであった。

棺に付き従ったのは家族と数人の友人のみであった。サン・トノレ・デロー教会での葬儀の後（というのもこの英国国教会信者の女性はカトリックに改宗していたからであるが）、パツシーの小さな墓地に向かい、そこでポリーヌはすでに父の眠る墓に埋葬された。

ターン家のネオ・ゴシック様式の小さな礼拝堂からほど近いところに、今日ではマリー・バシユキルツェフの広大なビザンチン様式の霊廟が屹立している。このうら若きロシア女性もまた、絶対の探求に憑りつかれ、悲劇的な運命の犠牲者となった。しかし、このロシア女性に負けず劣らず、ポリーヌ・メアリ・ターンの名が後世に伝えられたのは、「年金生活者」としてではなかったのである。

一九〇九年当時、ポリーヌ・メアリ・ターンが、それより数年前に、サッフオーヤその美しい女友達を称揚する十五冊ほどの韻文や散文の詩集を発表し、スキヤンダルにまみれながらも一定の成功を収めた女性詩人ルネ・ヴィヴィアンの本名であることを知っている者は、ごくわずかに過ぎなかった。

したがって彼女の死が耳目を集めることはなかった。それでも十一月二十一日、『フィガロ』紙は、実に不正確な次のような短い死亡記事を掲載している。

『コム踊り』、『レ・キタリッド』の作者であるルネ・ヴィヴィアン嬢の逝去を告知する。同嬢はボワ通りの神秘的な自宅にて逝去した。同嬢は幾本かの蠟燭の光のみがかりうじて照らす深い闇の中で仏像に囲まれて悦に入っていた自宅にて、漸進的衰弱により逝去した。ここ数カ月来、同嬢はその異教的な理想像に別離を告げていたようである。神秘思想に憑りつかれ、同嬢はカトリックに改宗した後、没した。

これがルネ・ヴィヴィアンの伝説の始まりであった。

当時のフランス共和国大統領はアルマン・ファリエールであった。アリスティッド・ブリュアンが首相となった頃

で、「フランス全体の利益の名において」諸改革の計画を実行しながら、彼はマティニョンの官邸に一九一一年まで留まった。無宗教学校の問題、労働者や農民の定年の問題、比例代表制などが世論を騒がせていた。今日に至るまで目新しいものはなにも生み出されていないことがよく分かる。

一九〇九年二月九日にモロッコについての両国の共同宣言が發布され、ある程度の緊張緩和がもたらされたとはいえ、フランスとドイツは相変わらず睨み合っていた。この緊張緩和は実に束の間のもので、一九一一年、次いで一九一四年にはすべてが振り出しに戻ったのであった。

他の反響も新聞を賑わせていた。ブレリオは英仏海峡を飛行機で初横断した。快挙である。我らが同盟国であるロシア皇帝は、シエルブールの艦隊の閲兵式に自ら臨席するという榮譽を下された。伊達男の大統領フェリック・フオーレ（かの「葬送の儀」で名高い）のかつての愛人であったメグ・シュタインハイルは、夫の殺人について偽証したかどで告発され、パリの重罪院に出頭していた。そして、重大なことに、大統領は法廷にいた女性を全員排除したのであった。これにより被告人たる同女は、勝訴して無罪放免となり、その後さる英国の貴族と結婚することになる。この三年前にはドレフュスの名誉回復がなされ、軍隊に召喚されて、レジオン・ドヌール勲章を佩用した。ゾラはと言えば、パンテオンの凍り付くような丸天井の下に眠っていた。かくして歴史の一頁が、少なくともそう思われていたが、確かにめくられていたのである。

芸術と文学においては、もうひとつ別の時代に向かっていた。象徴主義はすっかり死に絶えていた。未来主義やバレエ・リュスも当時パリで隆盛を極めていたが、決然と新しい時代を予告していた。新時代は、ギマールの地下鉄の出入口や、ボナヤカロリュス・デュランの飾られた豪華なブルジョワのサロンを、はるかに時代遅れのものに見えるように仕向けた。

ジッドとクロードルは重要な著作を発表し、ヴァレリーは沈黙していた。一方ブルーストは『失われた時を求め』を構想し、ロラン、ユイスマンス、モレアスやジャリがこの世を去った。それはまた、ラルボーやファルグ、モリーヤックやアポリネール、そしてサンドラールがその初期の詩を発表する時代でもあった。ピカソはすでに『アヴェイニヨンの娘たち』を描いていた。ドビュッシューは『前奏曲』を発表していた。ヨーロッパの他の地域では、リルケ

が『マルテの手記』を書き終え、ジョイスは出版社を見つけられずにダブリンとトリエステの間を行き来し、ペソアは英語でソネットを作りながらリスボンをぶらついていた。

このあたりで一九〇八年から一九一〇年に至る回顧はやめておくことにしよう。このような回顧は、我々が詩人ヴィヴィアンを位置づけるのには役立たないからである。ヴィヴィアンは自分の生きた時代からは実際逃れてもいたし、緊密にそれに参画してもいたからである。実際、ベル・オテロのバリに住み着き、そこでギリシアのサッフォーを夢見たヴィクトリア時代の若き英国女性をどうしたら把握できると言うのだろうか。

多くの人々にとって、ルネ・ヴィヴィアンは一つの名前でしかない。ある人々にとってそれは夢を見させる名前であり、またある人々にとっては熱狂させる名前であり、文学史愛好家の何人かを満足させる名前なのであった。

ルネ・ヴィヴィアン。ある種のフェミニニストにとっては旗手であり、女性同性愛のすべての研究においては言及すべき典拠であり、「百パーセントのサッフォー」として女性同性愛者たちから標榜される歴史的文学的著名人である。しかし、この女性 は 真実のところどのような女性だったのだろうか。

彼女の幾つかの詩行の引き裂くような調子や、彼女の人生に結びついているように思われる奇妙な謎に驚いた私が自問したのはこのような問いであった。彼女と実際に面識のあった人びとが皆彼女について話している様子（しかしおそらくあまりにも慎み深い人々もいたであろう）は、比類なき、独創的な人間性というものを明らかにしている。「ルネ・ヴィヴィアン」という悲劇的で天才的な女性詩人と、彼女をよく知っていた「ヨルスカ」ことシャーロット・スターンは言っていた。

ヴィヴィアンの伝記を書くのは、だからと言って全くたやすいことではない。執拗に残り苛立たせる謎は、先にも述べたように、アンドレ・ビイが「一九〇〇年のサッフォー、百パーセントのサッフォー」と名付けた女性に結び付けられている。彼女の中に、非物質的な、夢見がちな、確かに同性愛的ではあるが、しかし貞潔な、そのことが救いとなるような詩を編んでいた、一種の一九〇〇年代の理想的な若い女性を見る向きもあった。それとは裏腹に、彼女のことを、悪魔的で神経症的なサッフォーとして、すなわち典型的にキツチユな一九〇〇年代の悪趣味の権化として思い描く向きもあった。彼女は、救済される女性なのか、断罪される女性なのか。

文学史を少しは知っている者ならばこう言うだろう。ルネ・ヴィヴィアンだって？　そして次のような文言で綴られた分類カードを取り出すだろう。

ロンドンで生まれパリに定住。サッフオーとレスボス。ボードレールとヴェルレーヌ。一九〇〇年代の道具立て。ベル・エポックの女流ロマン主義。レミ・ド・グルモンの「アマゾーナ」として知られるナタリー・バーネイとの狂おしい恋、定型詩の信奉者。ボワ通りの邸宅、鋳のうちつけられた窓(コレット)。仏陀、薫香の匂い。東洋への旅。ミティレーネーの別荘。董への愛。ロスチャイルド家の夫人の囲い者。絶望と嫉妬により餓死、等々。

古書マニアや詮索好き、図書館の探索者たちは、甘美なまでに退廃的でいかにも象徴派好みのレヴィ・デュルメールによる青っぽい表紙をしたその著作を必ずや思い出すであろう。かのパステル作家の作品は今日日本人が争って買い漁っているのではあるが。

たぶん、批評家や伝記作家は、その作品についてより客観的な判断を下すであろうか。残念なことに、彼らはお互いに食い違っている。アンドレ・ジェルマンはヴィヴィアンを思慮深く憂愁に満ちたハムレットとしているし、コレットは神経症でアルコール中毒者ではあるが魅力的な女性であるとし、ル・ダンテックは心ならずも異端者であり、自ら知らずしてキリスト教徒である女性としている。ユベール・ジュワンは「いかがわしい場末をうろつく」バックカスの巫女だと言い、レオン・ドーデは「派手な色のはかない蘭の花」だと言い、アンリ・クルアルはベル・エポックのガラクタ置き場をさ迷う嘆きのベレニスだと言う。誰の言に従えばよいのだろうか。

辞書や百科事典、文学指南書なども我々によりよい情報を与えてくれるわけではない。それらの書物は、ヴィヴィアンをニューヨーク生まれだと言ったり(『二十世紀ラールス大辞典』)、「たまたま」パリに生まれたと言ったり(ヴァン・ドゥーデン)、はたまたロンドン生まれだと言ったりしている。これはまあようやく正解なのではあるが。ある詞華集では、ヴィヴィアンは「セヴィリアやコンスタンチノーブル、そして東京に住んだ」ことになっているが

これは間違いない。ついには、パリのサロンについての博士論文の中で、ヴィヴィアン邸では、「詩と音楽と、ジャズまで演奏されていた」と大真面目に宣言するまでである（L・リエーズ）。一九〇六年のパリでジャズとは！音楽学者の見解を聞いてみたいものである。

ヴィヴィアンについて書かれた数多くの事柄から、奇妙な愚言集とでもいったものを作れそうである。実際、ヴィヴィアンを「一九〇〇年代の同性愛的詩」というレッテルを貼るに際しては、ほとんどの人が十分に情報を得ていると自認しているからである。しかしこのような比類なき女性のこれほどまでに独創的な人となりは、このような分類に正確にあてはめられるものなのであろうか。誰がブルーストを「一九〇〇年代の同性愛的作家」に分類しようなどと、あるいはジュネを「一九四五年のゲイ作家」などと思うだろうか。そしてヴィヴィアンの作品は、その主題である女性同性愛そのものよりもっと遠いところまで達しているのではないだろうか。

それに、ヴィヴィアンについて何かを書いた人々のうちで、その作品をすべて読む労を惜しまなかった者がどれほどいたのだろうか、ということも考えてみるべきだろう。すなわち処女作である『習作と前奏曲』の詩から『彷徨』の最後の一行までである。この作品は確かに、今日でも入手困難であり続けている。十年ほど前にいくつかの作品集がレジーヌ・ドゥフォルジュ社から再版されたにもかかわらず、ヴィヴィアンの著作は今日ではなかなか見つけることができない。この伝記と並行して、ヴィヴィアンの『全作品集』を出版することによって我々が埋めようとしているのは、このような欠落なのである。

私にとつては、エディット・モーラの美しい書物である『サッフォール』（フラマリオン社、一九六六年刊）の中でルネ・ヴィヴィアンに捧げられた数行に関心を持って以来長きにわたって、モペール街の古書店のショールウィンドーの前で狼狽して立ち止まったものである。そこには、一九三四年にルメール社から出版された『全詩集』の二巻本の一巻が安価で陳列されていた。私はその小さな本を買ったが、それからヴィヴィアンの出版したものをすべてそろえるまではかなりの時間、というより年月がかかったのである。

実際ヴィヴィアンは、一九〇一年から一九〇九年の死までの間に実に定期的に作品を出版したことを知っておく方が都合だろう。この短い期間に、彼女は二十五冊以上の本を出版しているのである。それらをすべて集めるのはし